

新刊紹介 -- 佐藤元彦編『貧困緩和・解消の国際政治経済学』（ブックシェルフ）

著者	野上 裕生
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	123
ページ	55-55
発行年	2005-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005585

新刊紹介

佐藤元彦編『貧困 緩和・解消の国際 政治経済学』

野上裕生



築地書館、2005年

二世紀初頭、開発援助の分野は貧困削減を軸にして動いている。それに伴って貧困削減を取り上げた開発関係の本もかなり出版されるようになった。このような中で、「貧困削減」や「開発」そのものを批判的に問い直そう、というのが本書である。

ミレニウム開発目標や貧困削減戦略文書、マイクロファイナンス、参加型開発や内発的發展、持続可能な發展といったスローガンが提唱されている一方で、貧困を克服する手がかりさえつかめない社会もある。このような中で、なぜ「開発」「貧困」をめぐる議論が展開しているのか、世界的に見て貧困削減が進まな

うとしたのが本書である。本書は、「誤解をおそれずに言い切つてしまえば、貧困問題が常に政争に取りこまれてきたことが、その解決を延ばし、あるいは問題をかえって悪化させるという結果を招いてきたのではないか」（本書Ⅲページの「编者まえがき」）、という問題意識に従って、愛知大学を中心に行われてきた共同研究の成果をまとめたものである。

ここで「政争」とは二〇世紀の冷戦・冷戦終結以降は紛争や戦争の争点に貧困が取り上げられてきたことを意味している。

第一章「国連化と非国連化の相克——経済問題を中心にした国際機関の政治性」(河辺一郎)は、国連の理念、たとえば民主制に対してアメリカを中心とする先進国が対抗し、経済問題をOECDやサミットという国連以外の領域に持ち込んで解決しようとしてきたこと、その一方でアメリカはUNCTADおよび新国際経済秩序(NIEO)やUNESCO等の国連機関に対抗してきたことが分析されている。さらに著者はアメリカのレーガン政権が行った経済政策(レーガノミックス)が途上国に大きな打撃を与え、ブレトンウッズ機関がその後始末を担わされたことが正当に認識されることなく、NGOがブレトンウッズ機関を批判している現状の問題点を指摘している(本書三三〜三四、三九ページ)。

本章は国際機関の政治性を批判する場合には具体的な歴史的文脈を十分

考慮する必要性を訴えている。

第二章「世界銀行の開発途上コースとネオ・リベラル型統治性——批判的考察」(原田太津男)は様々な開発構想(開発途上コース)。本書四二ページ)の問題設定の意義を、主流派デイスコースの代表である世界銀行の開発論を事例に批判的に分析したものである。本章によれば、世界銀行に代表される主流派開発論のデイスコースは①方法的個人主義と合理的選択論に依拠して把握された制度認識に支えられた合理的な経済市場論、②小規模で自発的な個人から構成されるものとして理想化された自発的結社/共同体/市民社会論と、開発/発展の効率的な手段として理解された社会集団とその機能(ソーシャルキャピタル論)、

③開発マネジメントの枠内で手続き合理性と正当性の観点から把握された政治論(正確には統治論)にまとめられる(七八ページ)。

第三章「貧困削減戦略における新視点——PPAとPRSP」(武田圭太)は①貧困者の観点で貧困状態を調査研究し貧困者が現実をどのように認識しているかを内観すること、②認知された貧困状態を反映した諸政策を立案するまでの過程を確立し、貧困の現実と貧困の削減政策を連結した枠組みを設定することを課題にして、参加型貧困アセスメント(PPA)と貧困削減戦略文書(PRP)を考察している。

第四章「国連「貧困根絶」のための

十年」と脱貧困方策」(佐藤元彦)は国連システムを通じてグローバル化された「ディベロップメント」(development)のアジェンダを通じて学界に注入された概念、用語、その評価が無批判的に取り入れられる傾向があることをマイクロファイナンス(microfinance=MF)の貧困への効果、最貧困層への対応をめぐる議論を中心に検討している。

第五章「貧困削減とマイクロクレジット」(中村まり)は文献サーベイをもとにして、MFを通じた貧困削減効果、それを通じた貧困層の市場への参加の可能性について考察している。この章で著者は補助金依存から脱却して金融機関としての自立を目指す金融制度アプローチと、貧困削減を第一目標にして金融以外の基礎教育やビジネストレーニングも提供する統合的アプローチを紹介している(一六一〜一六三ページ)。

本書は分量が比較的少ない中に豊富な内容を盛り込み、全体的には高度な内容になっている。「貧困イシュー」の脱構築」(viiページの「编者まえがき」)をめざして、「開発」「貧困」をめぐる政治経済学的要因や思想的態度を批判的に考察している。本書は開発経済学の初心者に加えて、開発経済学や貧困研究にある程度親しんできた人にも、自分の学んできたことを一度冷静に見直すのによい本だと思われる。

(のがみ ひろき/アジア経済研究所開発研究室)